

氏名(本籍)	いずも しゅんめい 出雲春明(秋田県)			
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博甲第5965号			
学位授与年月日	平成24年3月23日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	誕生と始まりの思想 -アレント政治思想研究-			
主査	筑波大学准教授	博士(文学)	五十嵐 沙千子	
副査	筑波大学教授	文学博士	伊藤 益	
副査	筑波大学教授	博士(文学)	桑原 直己	
副査	筑波大学准教授	Ph.D(レトリック)	対馬 美千子	

### 論文の内容の要旨

本論文はハンナ・アレントの政治思想における中心概念である「誕生」を究明することを目的としている。この概念は、人間一人一人の誕生に既存の秩序を更新する「新しさ」を見出すものであり、そこにおいて志向されているのは新秩序の「始まり」を切り拓く可能性である。この意味で、それはアレントが学位論文以来、一貫して関心を傾けている「新たな共同体」の樹立をめぐる問いのなかに位置づけられる必要がある。代替不可能な個々人が他者と共同関係を新たに作り結んでいくところに成立するとされるこの新たな共同体についての構想は、全体主義体制下において人々がアトム化されていく状況を経験したことなどを通じて彫琢されていき、最終的に誕生概念がその中核に据えられることになった。そして、その際にアレントが強調するのは、あらゆる誕生が『メサイア』において語られるキリスト誕生伝説に比肩しうる意味を持ちうるということである。すなわち、どの誕生も世界が救済され、新たな秩序が設立される可能性の萌芽たりうるということであり、この意味で万人が世界の帰趨に関わる者としての責任を担っているとされる。そして、斯かる世界への責任を引き受けるということは、自らの誕生が比類なき「新たな始まり」であることを自覚し、これを引き受けて「活動」するということである。そして、活動しつつ他者に自らの新しさを示す時、人々は既存の習慣やイデオロギーへの従属から脱して、「個」に立ち戻っているのであり、またそうした個々人が新たに「共同関係」を取り結ぶ道もまた切り拓かれることにもなるのである。これに具体的な表現を与えるのならば次のようになるであろう。すなわち、いかなる共通のコードにも回収されえない独自の「パースペクティブ」を個々人が取り戻し、そこに立脚して意見を応酬するとき、そこには旧来の秩序における決まり事を盲目的に前提とすることのない関係が成立することになる。そして、アレントの言うところの、この「政治的空間」、「公的領域」を条件として初めて新たな秩序が構築される可能性が示されるのである。もちろん、一端取り戻されたかのように思われるこの各人独自のパースペクティブも、きわめて不確かなものであり、既存の規範やイデオロギーの影響下に置かれ、それによって画一化される危機に常に曝されている。だが、誰も自分のパースペクティブを完全に捨て去ることはできず、それを他者の前に露わにしようとする欲求も常に各人の中に熾火のように燃えている。そして、新たな共同体の設立につながりうるこの欲求が淵

源しているのは、究極的には各人の誕生と同時に生じている新たなパースペクティブの始まりであると言わざるをえない。この意味でアレントにおいて、あらゆる誕生は新たな共同体の樹立を予示し、世界を救済する救済への希望が孕まれているものとされるのである。そして、これがアレントをして誕生を政治的実践の核として思考せしめた理由でもあった。

## 審査の結果の要旨

まず、批評の大略を述べたい。

本論文は、アレントの最も初期の論文から彼女の政治哲学の再構成をするという、アレントの思想史的研究の領域において非常に貢献するところの大きい労作である。ただ、「誕生」概念の持つ政治哲学的射程は、「他者」の問題とあわせて追求していかなければ明らかにすることができないのではないか。この問題は課題として今後の研究の進展に期待したい。

本論文の独自性としては、上述のように、ハンナ・アレントの政治思想の成立過程において、彼女の学位論文『アウグスティヌスにおける愛の概念』が果たした役割を重視していることが挙げられるだろう。アレントの政治的著作においてはしばしば、とりわけその議論の核心部分においては必ずと言ってよいほどアウグスティヌスについて言及されているにも関わらず、従来の研究では彼についての研究である学位論文はおろか、アウグスティヌスの存在の重要性が本格的に議論されることはほとんどなかった。そこで本論文では彼女のこの初期の研究と円熟期の政治思想との思想的連続性を論証、強調しつつ、議論が進められている。その結果、明らかにされたことは彼女の人間分析には、常に一貫して「単独の個としてのあり方」と「他者との共同関係におけるあり方」の二つの軸があり、両者の結合点において初めてアレント政治思想の中心概念である「誕生」の意義も判然としたものとなりうるということであった。アレントの学位論文の役割を軽視する従来の研究では、彼女の思想のこの二つの軸の存在が必ずしも明確に示唆されておらず、畢竟、誕生概念の位置づけもぼやけたものとならざるをえなかった。そして、これがまたアレント思想において中核的なものとして規定されていながらも、これまで誕生概念がほとんど主題的に研究されることがなかった要因であると考えられる。これに対して、本論文はアレントの関心の所在を初期の思想から丹念に洗い出すことを通じて、誕生概念の意義を闡明することに成果を出している。

反面、本論文の課題としては、まず、本論文の第一章においてアレントのアウグスティヌス研究を読み解いた際、彼のキリスト教への回心を彼の思想上の重要な契機として提示したのにも関わらず、回心以前のマニ教に深く傾倒していた時代との思想的スタンスの差異について言及されていないことが挙げられなければならない。これは非常に重要な今後の課題として指摘される。

次に、アレントが語る「子供」というあり方についてさらに踏み込んで解釈する必要性が見られる。本論文では概ね、子供が「生物学上の意味」において記述されていた。しかし、この子供という言葉はアレントにおいて二つの位相において把握されうることが指摘された。つまり、アレントは「第二の誕生」という表現を用いて、既存の規範の桎梏からの解放とそれに伴う自己の存在の「新生」の経験について語っているが、この新生存在についての「比喩表現」としても子供というあり方が把握されうることである。アレントにおいて「誕生」はこの世に生を受けたという生物学的含意において語られるのと同時に、第二の誕生という表現が物語っているように比喩的に用いられることもあるのであり、二義性を有している。これと同様の構造は「子供」についても見出されるべきである。斯かる観点からも本論文の議論は再検討されていく必要があるだろう。

平成24年2月6日、人文社会科学研究所科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で

合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。